

「もとはこちら」のお話し

№55 今月のテーマ また会うための、さよならを



ある日の勉強会の平井先生

身に覚えのない事は
身に覚えのあることよりも
根が深い

平井謙次作 日めくりカレンダーより

北原ゆり筆

「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓つ心の悲しさよ」とは、戦後間もない頃に流された連続ラジオドラマ、菊田一夫の「忘却の花びら」の冒頭で流されたナレーションです。

聞く所によると、そのドラマが始まる時間帯になると、銭湯の女湯がガラガラになったという事です。運命的な出会いと別れに翻弄され、ようやく会えると思った二人が、またまた会えぬままにすれ違ってしまうこのメロドラマに、日本中の女性が決したのです。

しかし運命的な出会いと別れは、何もラジオやテレビの中だけのものではありません。私達の実際の人生においても、出会いと別れは数限りなく生じます。男女の間は勿論の事、親子の間、兄弟姉妹の間においても、また友人知人や師弟の間においても、そしてまた可愛がつていたペットと飼い主の間においても、出会いがあれば、必ず別れがあるのです。

生あるところには必ず死があるのと同じ様に、出会いのある所には、必ず別離があり、生死一如のように、出会いと別れも一如のものです。そして「去るもの、日々にうとし」といわれるように、去っていく人は、記憶の中から段々と遠ざかっていくと言われています。

初対面でも、お久しぶり

ところで昔ある人から、「時には私の事を、思い出してくれる事がありますか?」と聞かれ、「思い出した事など、一度もありません」と応えたところ、絶句された事がありました。

それで、「思い出すためには、忘れなければならぬですから」と付け加えたところ、再び絶句されました。しかしその絶句は、明らかに初めのものとは違うもので、とても嬉しそうな表情を見せてくれました。

またある時、随分ご無沙汰が続いていたある人が、久しぶりにお電話を下さり、「もう、私の事などお忘れだと思えますが・・・」と話し始められましたので、間髪いれず、「いえ、忘れた事など一度も有りません」と応じたところ、大笑いされ、大層喜ばれたことがありました。事実、忘れてなどは、いなかったのです。

また、出会いといえば、今まで一度も会った事はないはずなのに、涙が出る程の懐かしさをおぼえた人もありました。

そういう話はさておき、ある日遠方から勉強会に來られた人がありました。その方に向かつて平井先生が、「おう、あんた、久しぶりやナア」と話しかけられました。ところがその人は、「いえ、私は今日、初めて先生にお会いしたのです。今までに一度もお目にかかった事はありません」と応えたのです。

すると先生は、「いやいや、確かに今生では初めてかもしれませんが。しかし私の話をラジオで聞いたからといって、わざわざそんな遠い所から会いに来て下さるという事は、よほどの事です。同じラジオを日本中の何万人、何十万人という方が聞いて下さっているわけですが、その中であなたのようにわざわざ訪ねて来て下さるという方は、そんなに沢山ありません。

だからあなたと私の間には、よほどの深い縁があるという事です。縁がなければ、どんな話を聞いても、こんな形になつて現れて来る事は絶対にありません。そして、なぜそんな縁があったのかといえ、昔、あなたと私の間には、何かしらの深い関係があつて、結ばれていたという事です。だから、決して今日が初めてという訳ではないのです。分かりますか？」と言つて笑われました。



会う原因があるから、会う事になる

袖触れ合うも他生の縁、と言われますが、偶然の様にして初めて出会った二人であつても、もしもそこで何かが起こってきたとすれば、意識を超えた見えない世界で、二人は強く繋がりがあつていたという事がいえます。

どんな小さな出会いであつても、同じです。出会った後で、二人の間に何らかの事が起きてくるという事は、その結果から見てその二人の間には、その出来事に見合う何らかの原因となるものがあつたという事です。

もしも原因となるものが何もなく、互いに相手を意識する事

もなく、ただ、すれ違つていく筈です。

話は少しずれますが、新聞等で交通事故の記事を見ていて、ふと気付いた事がありました。それは加害者と被害者の年齢が近い場合がとて多いという事です。

たまたまその日の分がそうだったのかと思い、別の日の新聞を改めて開いてみたのですが、やはりそうでした。

交通事故のような場合は、加害者にとつても被害者にとつても、事故を起こして初めて相手と知り合ったという場合が殆どだと思います。

しかし彼らの間には、何らかの出会いをなければならない必要があり、理由となるものがあつて、それでその結果、二人は出会つていくのです。二人はそれぞれに、その同じ時間に同じ場所であつたという、同じ因子を持つており、片方はそれを加害者という立場で、もう片方はそれを被害者という立場で、自分達を演じているわけです。結果からみて、この二人の中には、その場所での時分ばかりあい、事故を起こす、起こされるといふものを持つていたという事が分かります。

過去の清算

それは今は目に見えないその昔、二人は今とは逆の立場で事故を起こし、そして起こされていたと考えられます。そして事故が起きたその時に、完全な解決が出来ていなかった為に、二人は再び出会う、過去の清算をする事になるのです。

以前と立場を入れ替え、加害者は被害者に、そして過去の被害者は今度は加害者になるという事で、過去の清算をする訳です。

勿論意識的にそうする訳ではありません。無意識世界の力が働き、バランスを取る力となつて両者の貸し借りを正すために、二人を出会わせたのです。

過去の事故の清算ですから、今回の出会いもまた前回と同じ様な、激しいぶつかり合いの出会いになる訳です。過去に自分がした通りの事を、今回は自分がされ、また昔自分がされた通りの事を、今度

は自分がするのです。結果として、それで初めて両者のバランスが取れ、貸し借り無しとなるのです。

ですから今回もまたその事故の対応を間違うと、またまた二人は立場を入れ替え、いつの日かまた同じ様な事を繰り返す可能性が、非常に高くなる筈です。

正しい対応とは、事故を起こした責任、そして事故を起こされた責任は、夫々自分の中にある事を深く認識し、互いを責め合う事なく、赦しあい、夫々が自分の行動の反省をするという事です。

相手を赦すという事は、過去の自分の間違いに気付き、将来に向かって自分の行動を訂正するという事です。自分で自分に詫びるという事です。

ですからもしも今回正しい解決がなされ、穏やかな正しい別れ方をすることが出来たとすれば、その事故は後々まで尾を引くことはなく、よって二人をいつまでも苦しめ続ける事にもならないはずで、交通事故に限らず、どんな事であっても、間違った解決をした時には、その事はまた次の難儀となって、新たな事故や事件や問題が起きてくるのです。

幼い頃、母から教えられた事がありました。「どんな人でも、さようならをする時は、それが今生の分かれになると思って、さようならをしないさい」と。

「いつ何が起きて、それがこの世の最後の別れになるかも知れないのだから、決して後になって後悔する事のないように。例えば、けんかしたまま、分かれたりする事のないように」というものでした。そして、「次に会ったときの事を、ワクワクしながら待てるような、そういうさようならをしないさい」とも教えられました。

そういえば大喧嘩の末に、その夜、脳出血を起こし、急死してしまった奥さんがいました。憤死に近い死に方です。こんな形で亡くなられた奥さんもとて不幸ですが、遺されたご主人の方も、本当に不幸です。見る影もない程に打ちひしがれ、寿命を縮めてしまった様でした。これなどは、ある意味での相打ちです。よほど深い何かが二人の間にあったのでしよう。自然の摂理から考えれば、この

ご夫婦はまたいつか出会い、関係修復の為の人生を、共に送る事になる筈です。

今、ここに、過去も未来も存在する

誰でも経験する、人と人との出会いと別れ。そしてそこから生まれる限らない喜びや哀しみ。悲しみの最大のものは、やはり愛する人との永遠の別れでしょう。二度と会えないその悲しみは、時間が経てば薄れていくという様なものではなく、何度も何度も悲しみが心を襲います。しかしそのような辛い別れを体験できるという事は、別の見方をすれば、その人はとても幸せな人であるという事もできるのです。心を寄せ合う人がいた、大切な人がいたという経験もないままに、寂しい生涯を終える人よりも、何倍も何十倍も素晴らしい人生だと思っています。

その人と出会えたというその喜びや嬉しさは、相手の人がたとえ死んでしまったとしても、その記憶までもが消えてなくなる事はありません。

「過去」とか「未来」という事は、私達の概念の中にしか、ありません。現実には過去も未来もなく、あるのは、「今」だけです。

今その人を懐かしみ思い出す、また会いたいと思う時、私達は現実にも、その人とここで会っているというのです。それは、過去の思い出や実態のない幻と会っているという意味ではなく、実際に今ここで、その人は私達と一緒に生きている、会っているという事です。

ふと漂ってくる香りに、過ぎ去った遠い昔の事をありありと思いつく事があります。過ぎ去ったはずの過去が、過去ではなく、その時ここに今よみがえっているのです。それは、過去は消えてなくなるものではなく、今もここに重なりあつて存在しているからです。過去も未来も、今ここに、存在しているという事です。次元を超えた絶対の世界では、今ここに、現在も過去も未来も重なり合つて存在しています。そして私達の命はこの相対の世界にも、絶対の世界にもただいま即今、貫いて生きているのです。だからこそ、心が昔



に行ったり、未来の事を想像したりする事ができるのです。今ここに、過去も未来も現在も、全てが重なり合って存在しているのです。

気持ちの良い分かれ方

ところで、親しい方のお家を訪ね、楽しくお喋りをして、さあお暇をといた時になり、玄關まで見送りにきてくれた人が、こちらが玄關を出た途端に、ガシャリと音を立てて鍵を閉めたという事がありました。あれほど楽しかったそれまでの時間が、何か急に嘘っぽく感じられ、薄ら寒い物を感じてしまいました。多分相手の方に悪気はなく、そういう細かい事には気を使わない、ある意味、おらかな性分なのでしょう。そしてまた多分、誰からもそういう心遣いの大切さを教えられる事のないままに、今まで来てしまったのでしよう。

しかし相手のそういう行動をとにかく言う前に、そういう事をされた自分自身が、いつか必ずそういう事をしていた筈に違いないと気が付いて、いたく反省した次第です。そういうさようならは、する方もされる方も、共に寂しいさようならです。これに反し、お別れしてからいつまでも、本当にこちらの姿が見えなくなるまで、いつも見送ってくれる友がいます。さすがにもうお家に入っただろうと思つて振り返ると、小さく、小さく見える友が、今もそこに佇み、手を振つて見送つてくれているのです。この人のように、私も心を込めた温かいお別れが出来るようになりたいと思いました。

素晴らしい別れは、また明日の素晴らしい出会いを招きます。出会いを良いものにしていくのも、また悪いものにしていくのも、結局は自分です。自分の内なる因子が縁となつて出会いを作り出すのであり、自分に原因となるものが何もなければ、どんな出会いも起きてくる事はありません。それらの出会いの全てから、自分が学ぶべき事は沢山あるはずですよ。

出会いと分かれは一つのもの



いかなる人との出会いであれ、相手の中から善なるものを引き出し、その出会いをより素晴らしいものになる様に意識をし、そして気持ちの良い別れ方をするように心していけば、人生はもっと楽しく、より素晴らしいものになる筈です。相手の中から何を引き出すかは、自分次第です。

ところで生き通しの命の現れである私達にとって、今までに一度も出会った事がないという様な人は、本当は一人としていないのです。なぜならば、お互いに肉体系は次から次へと着替えてはおりますが、相手はいつか出会った人であり、そしてまた、その人をよくよく見れば、それはもう一人の自分であるからです。交通事故のよくな悲劇的な出会いによって会う人も、結局は自分が自分と出会っているのです。仮に今その人は、自分とは別の人の様な姿となつて現れておりますが、それは過去の自分の姿と思つて間違いありません。生と死が、表裏一体のものであるように、また、出会いと別れが、一對のものであるように、私と私以外の人は、表裏一体のものであり、一對のものなのです。なぜならば、生がなければ死もないように、そして出会いがなければ別れもないように、「私」が存在しなければ、「私以外の人」も決して存在する事はないからです。

会う人全ては「もう一人の自分」であり、同時にそれは「私自身」でもあるのです。私が私に出会っているのですから、本来は「こんにちは」も「さようなら」も、ないのです。

〔ご案内〕

七月の勉強会は、七月二日(土)午後七時からです。
次回八月は、八月六日(土)を予定しています。
皆様のご参加を、お待ち致しております。
勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。
編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

HP <http://www.motoha-kochira.com>
mail: data3@motoha-kochira.com
TEL 073・461・6300